

母語支援による母国での学習・経験の活性化

-中国人児童の参与観察から-

林麗莉

1. 研究の背景と目的

【背景】

●中国から編入する児童が増加し、学校では母語支援が行なわれているが、その内容や方法は手探りの状態である。
●母国で学んだ既有知識や経験を日本語教室や在籍学級で学んでいる内容とどう関連づけるか、活性化し学習参加を促すかが課題になっている。

【目的】

参与観察を通して、次の2点を明らかにする。
①児童が母国の学習と経験をどのように活かしているか。
②母語話者による母語での支援(以下、母語支援)が教科学習でどのような役割を果たすか。

2. 先行研究

●母語による学習支援(朱 2003)
教科学習の取りだし指導における指導者の役割は、既有知識体系に関連づけるよう母語で促し、自力で日本語による理解や産出を促すことである。学習済みの教科の知識を活性化することは、日本での学習に役立てられる。
●既有の知識の活性化(市川2005)
学習するときは、私たちは既有の知識を用いながら、提示された断片的な知識をつなぎあわせようとする。

3. 研究の概要

- 児童: M(仮名)
- 出身国: 中国
- 来日時期: 2017年3月
- 日本語学習歴: なし
- 家庭言語: 中国語
- 兄弟: 妹
- 母国での教育: 小学生4年生前期まで
- 日本の小学校: 小学4年生4月に転入(現在5年生)
- 予備調査: 2017年5月8日~2018年2月14日
- 本調査: 2018年4月12日~12月5日

- 週2回程度、一回4時間教室に入り込み支援し、Mの授業中と休みの様子、Mが発信した言葉、身振り、手振り、表情などを観察する。
- そのフィールドノートをもとに教師の発問や筆者の働きかけに対するMの反応、授業の参加の様子、他の児童との関わりをエピソード記述(鯨岡2005)する。
- 入り込み支援の場で、筆者が行ったことや感じたことも合わせて、できる限り忠実に描き、Mとの相互の関わりを軸にエピソードの意味を探る。

4. 研究の結果

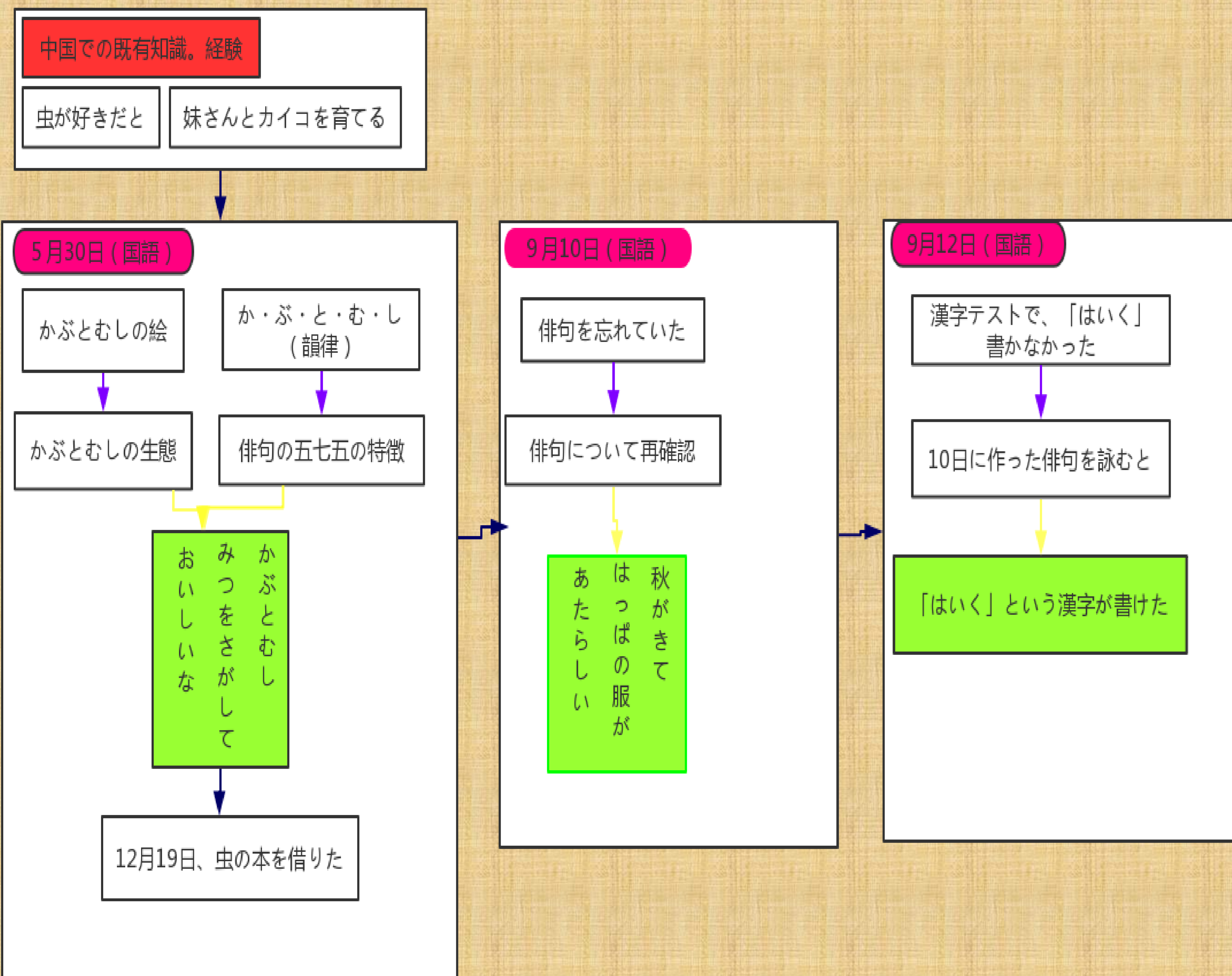
4.1 エピソード

<2018年5月30日 国語>

Mは虫が好きで、妹と蚕を育てたことがある。5月30日の俳句作り学習で、担任の先生の俳句「顔に振る、よゆうはないよ、熱中症」を手本に、「五七五」のルールを中国語で説明した。すると、Mは教科書の絵から「かぶとむし」を選び、指を折りながら、5音であると確認する。俳句の最初の五音を「かぶとむし」にした。私が「那甲壳虫吃什么(じゃ、かぶと虫は何を食べる?)」と中国語で訊ねると、Mは少し考えた後、「花粉(花粉)」と言った。Mはずっと指を折って、日本語でぶつぶつ言いながら、「かぶとむし、みつをさがして、おいしいな」という俳句を作った。

<2018年9月12日 国語>

5月30日に俳句を作ったが、9月10日の俳句作り活動では、中国語で五七五というヒントを出しても、思い出せなかった。しかし、5月に作った俳句を私が言うと、Mは俳句のルールを思い出した。与えられた季節という主題について中国語でやり取りをし、「秋がきて、はっぱの服が、あたらしい」という俳句を作った。更に、今日の漢字の学習では、Mは「はいく」という漢字が書けなかったが、私が9月10日に作った俳句を聞かせると、忘れていた「俳句」という漢字を思い出して書いていた。



5. 考察

国語の俳句作りにおいては: 母語支援によって、昆虫に対する知識、自然現象に関する知識・経験が活性化され、俳句の創作ができた

母語での働きかけによって、母国での知識・経験が活性化され、学習文脈を理解し、自分で課題に取り組み、解決する場面がみられた

教室での学習内容の理解と活動への参加が促され、達成感や自己満足感が得られている

6. 参考文献

- 市川伸一(2005)『学習と教育の心理学』岩波書店
- 鯨岡峻(2005)『エピソード記述入門』東京大学出版会
- 朱桂榮(2003)「教科学習における母語の役割—来日まもない中国人児童の「国語」学習の場合」『日本語教育』119号